

子宮がん検診（施設）

動 向

平成22年度の子宮頸がん施設検診の受診者数は18,811名であり、平成21年度18,364名、平成20年度17,093名と比較すると、年々増加している。一方、子宮体がん検診の受診者数は1,178名であり、後述するように若干減少傾向であった。さらに卵巣検診は314名の受診者であり、近年横ばい状態である。

近年子宮頸がんに対してHPV（ヒトパピローマウイルス）が関与していることが判明し、子宮頸がんに対する概念が大きく変化してきている。性器に感染するHPVには約30タイプが知られており、そのうち約15タイプが子宮頸がん関連HPVである。特に16型と18型が高頻度に認められる。ウイルスの検出検査が注目されて来ており、平成22年4月より、細胞診でウイルスの感染を示唆するASC-USという結果に対しては唯一保険適応でのウイルス検査（HPV核酸同定検査；ハイブリッドキャプチャーⅡ法）が認められている。当施設でも、平成22年度、細胞診がASC-USであった148名にHPV検査が施行され、その中で陽性例は50名（33.8%）であった。今後任意型検診として、細胞診とHPV検査の併用が当施設検診でも検討されている。また予防の面でも、子宮頸がんに進展する確率の高い16型・18型の感染を阻止するため、平成21年10月、厚生労働省がHPVワクチン「サーバリックス」を認可し、わが国でも接種可能になった。現在、厚生労働省のワクチン接種緊急促進事業によって、平成23年度末までのあいだは中学1年から高校1年までに相当する（概ね13～16歳）の女子は市町村が契約する医療機関で無料にて接種を受けることができる。

HPV対策以上に深刻な問題は、わが国における子宮がん検診の受診率の低さである。神奈川県の場合、行政検診、職域検診、ドック検診などを合わせても20%程度といわれ、しかも高罹患率の若年者に特に低く、高齢者の繰り返し受診が多い現実を、関係者一同が強く認識して行動する時期と考えられる。

結 果

（1）子宮頸がん検診

平成22年度の子宮頸がん検診受診者数は18,811名であった。年齢階級別受診者数は40歳代が最も多く27.6%であり、次いで50歳代22.8%、30歳代20.5%の順であった。子宮頸がん、異形成の発生頻度が高いとされている29歳以下の受診者の割合は7.6%と極めて低く、若い世代の受診を促す方策が望まれる。初診の割合は総数で32.9%あり、前年とほぼ変

わらない結果であり、年齢階級別では、29歳以下が68.8%、30歳代が48.6%、40歳代が34.6%と、年齢が進むにつれて減少している。がん患者の発見には、初診率の向上も必要である。子宮頸部細胞診の要精検率0.78%、要再検率1.34%、両者合わせた要再精検率は2.12%であった。再精検受診者399名の中から、子宮頸がん11名（0期9、Ib期以上2、腺がん2）と異形成40名（軽度27、中等度8、高度4、腺異形成1）が検出された。

子宮頸がん発見率は0.05%（初診0.08%、再診0.05%）であり、年齢階級別では、50歳代0.07%、29歳以下0.07%、40歳代0.05%、30歳代0.07%であった。発見された頸がん11例の病期は、0期9例、Ib期以上2例であった。例年と異なり、進行がんが2例も見られた。

異形成発見率は0.21%（初診0.32%、再診0.16%）であり、年齢階級別では、20歳代0.35%、30歳代0.41%、40歳代0.27%、50歳代0.09%、60歳代0.03%であった。若い世代の検診の必要性を示している。

（2）子宮体がん検診

子宮体がん検診受診者数は1,178名で、子宮頸がん受診者数の6.26%であった。平成21年度が1,141名、平成20年度が1,097名であり、若干減少傾向であった。平成18年度にがん検診指針が改正され、不正性器出血などの有症状者およびハイリスク者は、第一選択として医療機関の受診を勧奨することになった。そのため施設検診での子宮体がん検診受診者数は激減している。1,178名の受診者の中から、要再検3名、要精検1名（疑陽性1）が検出された。この4名の精密検査が施行されたが、子宮体がんは見られなかった。

年齢階級別に見ると、子宮頸がん検診受診者と異なり、子宮体がん検診受診者は比較的高齢者に多く、50歳代39.2%、40歳代33.3%、60歳代18.3%、30歳代5.3%の順であった。要再検、要精検になった者も50歳代3名、40歳代1名と比較的年齢の高い者に見られた。

（3）卵巣がん検診

平成22年度の受診者数は314名で、内訳は一次検診262名、二次検診52名であった。一次検診262名の中、卵巣腫瘍が判明した人が16名（6.1%）あり、2名が要治療で医療機関へ紹介され、14名が二次検診に移行した。二次検診では定期的に卵巣腫瘍の経過を観察している。

関係の集計表は92頁に掲載